

表現の原理

外山滋比古

0. 今から 50 年くらい前、大学の先輩である今井文男さんから、表現の学会を作りたいという誘いがあり、発足するまではかなり熱心に手伝いをした。その頃、今井さんに、表現の原理がはっきりしていないのではないかと言うと、そのために学会を作るのだと答えられたことを覚えている。私の考えからすると、今現在も、表現の原理が確立しているとは言えない。それに関して自分なりの見解を述べてみたい。

「表現」ということばは、英語の expression の訳語である。ex は「外へ」、press は「押す」、つまり押し出すという意味である。これに対応するのが impression で、im は「中へ」であるから、押し込むという意味であり、両語は緊密な関係にある。

ところが、impression は「印象」と訳され、「表現」とはまるで関係のないことばのようになっている。しかし、expression を考えるには impression を抜きにしてはならないので、この両者をふまえて表現について考える。

1. 表現には、絵、彫刻、音楽などさまざまなある中で、一番早く、一番広く行われているのが、言語表現である。言語表現の対象には、物事・思い・その他もろもろあるが、これらを言語によって表現

するとはどういうことかというところから、表現の考え方が始まる。

まず、ことばは、写真のように、対象をそのまま写すことができない。これが言語表現の第一の特質である。ことばで対象を描くときは、その対象のもつ多くの情報を捨象し、抽象化し、さらに変化を加え、再構成する。そのような表現行為だからこそ、発明なり発見なり創作なりがあるのであって、あるがままに、思ったとおりに表現するということは、不可能である。

一旦ことばによって encoding つまり記号化されたら、それから現物に戻ることできない。にもかかわらず、ことばによって対象を彷彿とさせることができると考えるのは、人間の心理的・生理的な性質による。この点に関して、言語学的な規定もまだ不十分であるが、表現の研究においてとくに重要なことである。

2. 人間は生まれてから数年の間に、言語を習得し、物事を表現できるようになる。これは人間に本能的に備わった能力で、事物とことばを関連付け、ことばを組織化する能力であり、私はそれを「絶対語感」と呼んでいる。この絶対語感を伸ばすことができれば、数多くのすぐれた詩人や文章家が生まれるはずである。

しかし、家庭でも学校でもそれを重ん

じないため、大きくなるにつれ、能力が衰えていってしまう。学校で教えるのは、文字によって示された知識のみであり、対象と言語との関係をとらえ、具体的な事物を記号化して表現するというクリエイティブな精神活動がなおざりにされたままになっている。

3. 表現は、対象を100%は再現できないという意味で、常に嘘を付いている。

たとえば、事件の目撃者の証言が信用できるかと言えば、そうとは言えない。その時・その場にいた人が事実を一番よく知っていると思いがちであるが、興奮したり茫然としたりしていたかもしれない。かりに冷静だったとしても、それを記号化するには、たくさんの情報を排除し、選択・整理しなければならない。

そのためにはある程度の時間が必要である。時間が経つことによって、情報が整理されるからである。つまり、対象を正確に表現するには、その対象から時間的にも空間的にも離れる必要があるということである。そもそも、対象と表現の世界の間には距離があるのであり、その距離を自覚することが大切である。

4. 表現は通常、受け手を想定して行われる。受け手はencodingされたことばをdecodingする。それがexpressionに対するimpressionでもある。decodingするには、言語のシステムやルールに関する知識・能力が、encoding以上に求められる。それは解釈を必要とするからである。表現には多かれ少なかれ、未知の、理解不可能な部分がある。解釈とはそのような、分からないところを理解し、

既知化しようとするものである。

読書によって、言語表現に示される知識を得るだけなのは、単なる物知りにすぎない。「論語読みの論語知らず」である。decodingするとは、受け手自身の考えや経験などにもとづいて、言語表現の本質的にもっている不備を補うことであり、そこに辞書的ではない文脈的に適切な意味を新たに付け加えることである。それによってこそ、読書は自己発見の喜びともなりうるのである。

5. 歴史学においては最近、革命的とも言える認識の変化が起きている。従来、歴史を語ることばは過去の事実を再現すると考えられていたが、それは誤りであって、歴史家がことばを通して理解・創作したものであるという見方がなされるようになった。ことばという記号が物事をそのまま写すことができない、つまり嘘をつくという性格から考えれば当然のことである。

また、ことばで表現する限り、対象とする過去との間には距離を置かなければならない。歴史的な物語やドラマが面白いのは、現代と距離があって、関係があいまいになっているからである。

ことばは、そのようなあいまいさによって成り立っている。人文系の学問は、このあいまいで、複雑怪奇な性格の言語によって成り立っている。言語による表現の原理を追究する表現学会には、新たな解釈学も含みつつ、言語学や文学、歴史学などにも刺激を与えるような研鑽を期待したい。

(お茶の水女子大学名誉教授)